



## インターネットによる「障害児と遊び」の情報交流と その効果

美作大学 地域生活科学研究所

客員研究員 渡辺 勤持

### はじめに：

健全な子どもは、発達段階に合わせて、市販の遊具で遊ぶ。

しかし、目が見えない、耳が聞こえない、あるいは感覚刺激を異なって理解する子どもや、理解はしても身体を思うように動かすことができない子ども（いわゆる障害がある子どもたち）は、遊具で遊ぶことが難しい。親は、遊びによって育つとわかっていても、どのように遊べばいいのか、どのような遊具がいいのか悩む。

「障害のある子どもと、おもちゃで楽しく遊ぼう」という情報提供をインターネットでする場合、どのような内容、構成にすれば、「なるほど、やってみよう」と思ってくれるのだろうか。障害のあるわが子と楽しく遊べる情報提供の可能性を探ることが本研究の目的である。

### 研究の進め方と方法：

ホームページ作成のための構成内容を考えるために、障害のある子の遊具と遊びに関する国内外の学会誌、書籍、Toy Library と関連する各国からのネットによる情報、親の個人的な体験を綴るブログ、障害別の親の団体からの情報、玩具販売を行う法人のホームページなどを参考に、障害の子どもが遊べる遊具の種類、遊具の購入の仕方あるいは作り方、親が関与できる遊び方、その遊具によって考えられる子どもの成長などを伝えるホームページ作成に必要な条件を明らかにする。

### 結果：

ホームページの基本的なコンセプトは、母親の気持ちに対応しつつ、具体的な遊びと遊具（市販遊具、手作り遊具、遊具として用いる生活用品）を述べることで、そ

のためのホームページ作成の参考となるものとして以下の情報が考えられる。

#### 1. 障害のある子どもの親による遊具や遊びの情報

##### 1) トイ・ライブラリの活動

1960年代から世界的に広まったトイ・ライブラリ (Toy Library) は、障害のある子どもの親が中心となり、自分の子どもがよく遊ぶ遊具などの話し合い、貸し借り、さらにはトイ・ライブラリでの遊具の貸し出し、遊具の紹介と遊びによる精神、身体機能の発達を伝える活動に展開した。親同士のふれあいの場として当事者同士の支援機能も果たしていた。

当時の情報提供の例として、二人の障害児の母親であるユンカー博士 (Junker, Karin Stensland) (スウェーデン) は、「あそびによる体系的訓練プログラム LEKOTEKET」1971 や第二回国際トイ・ライブラリ大会が開かれたときの特別講演 1981 の中で、障害を持つ親を勇気づけながら遊びによる精神、身体発達への重要性を示している。またローマリア (英国) は、障害のある子どもの収容施設での教育や地域社会のトイ・ライブラリの運営体験を踏まえて、自著「Play Helps」(遊びが、助ける) (1977) で、高価ではない市販遊具、トイレトペーパーの芯などの生活の道具、花を採ってきて花瓶こいけたり、買い物に行くときなどの生活のリズムの中の誰でもできる遊びを紹介している。

日本でも、おもちゃの図書館が増え、国際トイライブラリ協会 (ITLA) の電子ニュースレターでわかるように、トイ・ライブラリは世界的な広がりを見せている一方で、障害児のディサービス等の福祉施設の普及、イ

ンクルージョンやノーマライゼーションの理念に沿った  
トイ・ライブラリの展開、インターネットによる情報提  
供の少なさのため、障害のある子どもの遊具、遊びにつ  
いての情報も少なくなっているように思える。作成され  
るホームページは、これを補充し、障害のある子どもの  
親が必要とする情報に特化して進める必要がある。

## 2) 障害のある子どもの親のブログによる情報発信

親のブログからも、いい事例が見られる。その一例と  
して、笥 美貴さんの話しが田代屋本舗のブログで次のよ  
うに紹介されている。「未熟児で生まれた息子は手も小さ



く、握力も弱  
いので、市販  
のおもちゃ  
を握ることが  
できませんでした。マ

マの指は握ることができるのになあ、と考えた末、ママ  
の指くらいの細い持ち手部分のおもちゃを作ること考  
え付きました。さらに、持ち替えしやすいように長い持  
ち手にしました。障害児が《握る》という機能を獲得す  
るために、発達の状態にあった適切な太さ・大きさとい  
うのはとても重要なことでした。自分で握ることができ  
ないと、すぐに手離してしまい、「握る」という意思がつ  
いてこなくなってしまうのです。」

## 2. 親からの発信の展開としての団体による情報

親のブログがさらに大きな団体のホームページへと発  
展した例も見られる。パーキンス盲学校のおもちゃと遊  
びのホームページ (Wonder Baby) は、本研究の意図に  
非常に近い情報提供を行っている。ホームページの運営  
者 (Amber Bobnar) は、視覚障害の子ども之母親であ  
る。子どもはハワイで生まれ、育ったが、近くに障害の  
子どもがいなかったために自分でブログを立ち上げ、その後、  
パーキンス盲学校に入るため家族でボストンに移住した。  
彼女のブログを知った校長から盲学校のホームページを

使用しての運営を依頼され、現在も続けている。ホーム  
ページは、親として子どもの障害をどのように見るかと



いうことを  
背景に、わが  
子の病歴や  
生育歴を述  
べ、遊具や遊  
びを紹介し  
ている。現在

は、ホームページに感動したさまざまな親が体験を投稿し、  
自分と似た子どもの遊びや遊具をみることができる。

## 3. 障害者本人からの発信資料

自閉症の人が手のひらをひらひらさせたり、車輪を回  
し続けるような遊びは奇異な目で見られがちである。東  
田直樹さんは、著書でそれらの遊びを分析している。

本人の人が自分の体験を語ることは、子育ての親にと  
って、そういうことなのか、と納得できることが多い。  
数少ないが、ホームページには貴重な資料である。

## 4. 学会誌、書籍など専門家からの資料

玩具福祉学会の学会誌「玩具福祉研究」には、親が障  
害のある子どもの状態を述べ、発達や生活の中での玩具  
の役割、障害に合わせた玩具の使用などの発表がある。

また、身体の不自由な子どもに対してさまざまなセン  
サーを用いた玩具、センサーの作り方などの書籍による  
紹介もある。

## 結論：

ホームページ作成の必要条件には、1. 子どもの障害  
の状態と遊具、遊具を用いた遊びがわかりやすく紹介さ  
れていること 2. 子どもの遊びについて、その子ので  
きることから見ることの重要性を伝えること 3. 親が  
わが子の障害に連れ添っていい人生を送ろうと希望がも  
てる方向性を意識して情報を提供すること、が大切で  
あると考えている。今後、ホームページ作成と投稿による  
情報交流を進めながら研究を継続して行きたい。